

一里塚 孤松

われカガミ

大きな山の西側には、静かで平和な街があって、その北の方には赤いレンガで建てた丈夫な家がたくさん並んでいました。「カガミのお城」は南の森の奥にありました。実際はお城というにはとても小さくて、ほこらとか、やしろとか呼ばれていました。その前には石畳を敷いた広場があって、お祭りの晩などは大いに賑わいます。普段は静かですが、一日に一人は、必ずといっていいほど誰かがやってきます。「カガミのお城」の門を通して、らせん状の坂をずっと登っていくと、一枚の岩から作ったという立派な扉があり、その向こうには人がひとり入れるくらいの、小さな部屋があります。そこには椅子が一つ置いてあって、その前には古い木の箱が置いてありました。部屋の天井は吹き抜けで、お昼には椅子の背中から光が差します。その陽を頼りに、「カガミの部屋」-----この部屋はこう呼ばれています-----に来た人は木箱の扉を開けます。木箱の中には、みなさんが想像する通り、カガミが置いてあります。カガミは、女の子が友達にあげるために半分に割った、クッキーのような形をしていたので、「われカガミ」と呼ぶ人もいました。

そのカガミには秘密がありました。よく晴れた特別な日に「カガミの部屋」で木箱を覗き込むと、きつと、なにか映らないものがあります。たとえば、床屋のゲンが覗いたときは、いつもかけている青ぶちの眼鏡が写りませんでした。それを見たゲンは、小さい頃に教わったとおりに、お城から広場に降りて、目をつむって、風の声を聞きながらゆっくり、石畳の感触を確かめながら歩き回りました。次第に、ゲンは歩いているのに夢中になって、どれだけ時間がたったかわからなくなりました。目をつむってすぐは、ゲンの目は空の青や若草の緑や土手の褐色を求めて泳いでいましたが、だって目を閉じても光はそれをこじ開けて入ってきますから、でもその時になるとゲンの意識の波は、光をはね返すだけの落ち着いた鼓動をつかまえていました。どこかの山で喧嘩している小鳥の鳴き声まで聞こえるような気がしたときです。

そうか-----

ゲンはひとり叫びました。恥ずかしさの混じった後悔と、行き場のない怒りがどっと吹き出して、ゲンの血管は波打ちました。けれども、堤防を越えた波は、しだいに落ち着きを取り戻し、ゲンを導き始めました。

「おれは客に対して神経質になりすぎていた。髪の毛のバランスがほんの花びら一枚くらい違うだけでも、絶対に妥協しなかった」

ゲンの店はうまくいっていませんでした。見えすぎる眼鏡が原因だと、われカガミは教えてくれたのでした。それからゲンは、眼鏡を外しました。なるべくすばやく、お客さんの要望を聞いて、それに合わせて髪を整えることに尽力したのです。ゲンの腕は確かでした。それからゲンのお店は、面倒見の良さで手際の良さで大きな評判を呼びました。

「カガミのお城」には、あるときは、小説に行き詰まった作家がやってきました。このときは、カガミに写った作家の頭から、髪の毛がすっかりなくなっていました。彼女はそこで、人生の不条理をつぶさに描くことができないという自分の甘さを恥じました。そして、放浪生活ののちに、傑作を書き上げました。あるときは、大成功を収めた商人が、さらなる事業拡大のヒントを得ようとカガミにやってきました。しかし、カガミには何も、彼の姿さえも写りませんでした。そして彼は、石畳で泣き崩れました。おまえはすべて偽りだ、カガミはそう告げていると大商人は気づいたのです。そして彼は、今まで築いた財産のすべてをはたいて湖の畔に大きな病院を建てました。医者はそのいら中から集められ、街の医療はたいへん進歩しました。

大きな山の東側には、静かで平和な街があって、多くの人々は郊外の盆地に石造りの家を建てて住んでいました。瓦屋根の商店が軒を連ねる中心部は、街で一番賑わっていました。この街では、大事なことを決める時に、まず星占いをします。街の北の端には、小動物と小鳥で騒がしい森が広がっていて、そこに「ふえの塔」という、大きな天文台があります。空の上から見ると、羊飼いの笛のようにみえることがその由来です。天文台には、黒光りする筒が、たくさんのケーブルと一緒に、洞窟のように大きな地下室の中に固定されています。そして地上では、森の一番高い木の隣から、レンズの先が宙を吸い込もうとしているのです。

その年の冬は、大変な寒さでした。町の人々は自分の家をあたたくするのに、お金を沢山かけなければなりませんでした。床屋のモアの家では、暖炉の薪が足りません。隣の八百屋の家でも、またその隣でも、同じでした。街の議会は、これは大変だといって緊急会議を開きました。そこでは、秋の間に貯蔵しておいた野菜を外の街に売って、お金にしようと提案されました。でも、意見は二つに別れました。毎日凍えるのに飽き飽きしていた人たちの多くは、賛成しました。でも、反対する人たちは、食べ物がなくなってしまうと、大変なことになると考えました。そこで、街の議長は、みずから天文台に行き、副議長たちの立ち会いのもと、望遠鏡を覗き込みました。すると、曇の空にもかかわらず、赤い一等星が、確かに南の空にぶきみな穴を開けていたのです。

「外に野菜を売ることはしない。かわりに、夏に採れた野菜を使って、公民館で炊き出しをする」

次の議会で、こんなお触れが出されました。大きなお鍋を炊くには、街中の薪を一箇所に集めないといけません。だから、街の人ははじめ、反対しました。でも、公民館で大きなお鍋を炊くと、大勢の人が集まってきました。そして彼らは、あつあつのおいしいお鍋を頬張って、互いに励まし合いました。そして、ついに、冬が終わりました。

春は、ここ数年で一番かといわれるほど暖かく、人々は冬の厳しさをすっかり忘れて街中を彩る花々に心を踊らせました。もし、十分な食べ物がなければ、そしてみんなで協力することがなければ、厳しい冬を越すことはままならなかったでしょう。

「ふえの塔」には、どんな秘密があるのでしょうか。ふだん望遠鏡に映るのは、広大な闇に散りばめられた、幾何学図形のかけらだけです。望遠鏡は、暗闇から吸い込んだ光を、カガミを使って反射させます。そのカガミは、少年のポケットの中で半分に割れたクッキーみたいな形をしていたので、「われカガミ」と呼ばれていました。「われカガミ」は、なにか大事なことを決める時に、その決定が重大な間違いなら、南の空に、赤い星をあらわす。そして間違いではないか、大した問題ではない場合には、素っ裸の暗がりやが堂々と映し出される、そう言われていたのです。

* * *

中央横断道路三号線の敷設記録より

（：；）その高架が、山の東西どちら側を通るかが争われる。代表者による話し合いで解決の見込みなし。特に、東側の街の議会の奇妙な慣習が問題視された。近代化の遅れた集落の孤立の果てか。彼らの天文台を解体し、理科学大学院研究所の機関として接收する。骨董品同然で蓋がふさがった望遠鏡から、割れた鏡が見つかる。実は西側の街の隔離病棟にも割れた鏡が掲げられており、それらの関係に興味に向けられた。おそらく、地方に伝わる共通の言い伝えが、東西で独自に派生したものと思われる。西側の病棟は中世期古典派の第六弟子派の作風と酷似しており、国立大学文化教育連盟により保護が要請される。委員会は旧病棟を新たな学術協会の本部として用いることを決定。東西の集落は山之上市と合併し、鏡山地区と

名を改め、学園都市としての開発計画が始まる。現地の文化を尊重しつつ、自他との対話に始まる学問のシンボルとして、円形の鏡が最高会議室に掲げられ(：：)

* * *

「皆様、今日の議題は、映しすぎるカガミと映し足りないカガミについてです」

がやがやわめく学者たちを制して委員長が手をたたく。

「世の中には二種類のカガミがあるということを知っていますか？ それは、ふつうのカガミとふつうではないカガミだといえます。エ、あっはい。ふつうのカガミというのはな、君たちがその醜面を今朝さらしてきたやつさ。それですね、普通ではないカガミにも二種類あります。ものを余分に映すカガミと、映るはずのものを映さないカガミです。証言にもあるように」

ゲホンゲホンと、痰混じりの咳が響いて委員長は遮られた。

「えっと、委員長さん。光合成してきてもいいかの」

「なんですか、植物学者。早く行ってきなさい。」

植物学者は後ろの扉から、体を緑にしながらツルのように部屋を這い出ていった。委員長は続ける。

「証言は！ 証言はです。例えばカガミに星座が余分に写ったときは不吉の兆候だとか、言われて祀られたり、カガミを見て映らなかったものを想像すれば自分に足りないものがわかったりとか、そういった類です。証言があるのです。未来を見る望遠鏡だとか言われるらしい」

「えーっと、あのですねえ。望遠鏡はその『見る』ものとは違います。望遠鏡は星の声を聞いているんですよ。あの立派な耳でねえ、網膜なんかという時代遅れの器官とは違いますわ」

「天文学者、今は望遠鏡の話をしてるんじゃないやありませんよ。わかりませんか！ われわれの声をまず聞きなさい」

帰れ！ ロケットで家帰れ！

おい！

はい！

「こういった問題は、事件を逆にたどることで解決可能です。つまりすべてのカガミについて考えるのです。カガミは全部を映しますが、それはきっと映しすぎるカガミと、映し足りないカガミが合体してできたのです！ こうするとあらゆるカガミを系譜学の」

はい！

はい！

「君、それはカガミについての洞察が足りなすぎる。カガミはそもそも全てを映しているのか。我々は見たいものを見るということはよく言われるじゃないか。カガミも同じで、そもそも映したいものだけを映すのだ。映しすぎるカガミとか、映し足りないカガミとかいうものがあるのではないのだ。映したいものが違うだけだとなぜわからんのだ。だからカガミが合体したところで、」

「静粛に。やめてください、今日の議題は」

ツバを飛ばし合う歴史学者と心理学者を押し留めて、委員長は会議を始めようとした。

「今日の議題は、ものを余分に映すカガミと、映し足りないカガミがあるということです。そこです！ それをどう活用するのが今後の課題なのです。おそらく余分に映すカガミは、映し足りないカガミが消してしまったものを映していることと思われる」

はい！

「そもそもカガミの定義が不明瞭につき、そもそも前提が間違っている可能性をひ」

はい！

空手踊りをしていた物理学者が議場に向き直りおもむろに口を開く。

「いや、定義というのを問うことなく、それは否定可能である。現にカガミがある、それを割ってみようじゃないか。すると二つのカガミができる。そしていつまでもそれを繰り返すとな、できるじゃろ」

はい！

はい！

「うるさい！ カガミが小さいのがいっぱいできるのである。すると、いや、ここで考えるのは原子じゃ。原子一つで」

ニュートリノ！

素粒子がある！

「うるさい！ うるさい！ 原子一つではカガミではないのである。だからカガミはいつかカガミではなくなる。こんな状況で議論なんてできるのであろうか。これでは歩いているそばから床が抜けていくようなものではないか！」

「そうだ、素粒子はカガミではない！」

はい！

「ハッハッハ、物理学者と化学者の皆さん、これは私たちの世界の、この見える世界の話なのであります。さっきから原子だの反ったウシだなどと、何を言っているんでしょう。そんな話ではないんですよ、ウム」

学術評論家が顎の剃り残しをさすりながら神妙にうなづく。そういわれて、特に物理学者の方は意気消沈して引っ込んでしまった。

「実用性です、実用性です。ここで問われているのは応用なのです。どうすればこの証言を活かせるのかが問われています！」

委員長が机を叩く。

はい！

「映しすぎるカガミと映し足りないカガミは、エントロピーのアナロジーで捉えられるのです。一様な空間の情報量を区切ることができるのだ！ マクスウェルの悪魔だ！ 永久機関だ！ 二つのカガミを触れ合わない極限まで接近させられれば……」

情報工学者が歓喜に声を裏返らせて騒いでいる。

うるさい！

はい！

「いや、問題はカガミに映らなくなったものはどこに行くのかということだ。自説に照らして言えば、それはタイムトラベルということになる。つまり、空間的な移動はすべて時間的な移動で置き換えられるというこの理論は、縮減自由度問題の有効な解決策たり得ることが」

はい！

「しかし本当に消えたり現れたりするのだろうか？いや、もっと大きな前提が疑われる必要がある。つまり！　つまり！」

黙れ、反構造主義者！

はい！

はい！

「この世界はカガミによって映されたものだということです。すべての運動はどこかのカガミから別のカガミへの写像として捉えられる！　何兆、いや何阿僧祇あるかわからないカガミが映しているものが、この世界で！　で！　多くあることです、よくあることです。こういうことは。つまりですねアー、アー」

数学者が歩き回りながら泡を吹いた。

座って話すこともできないやつを会議に入れるな！

はい！

「いや！　いや、それは理解可能だ。ミクロな、この世界の複雑性が談合を起こして隠し通している宇宙の大大根本ルールが、これは意識だ！　根本ルールが我々の認知スケールでしっぽを見せているんです。これは量子脳的意識だ！」

脳科学者が白目をむいて頭を振っている。

はい！

そんな中で、ソクラテスが立ち上がる。

「皆さん、ここで考えるべきはこれら二つの鏡を向かい合わせにした時に何が映るのか、という問題ではありませんか。」

甲高い声が騒々しい議論に風穴を開けて、一瞬、会場が静まった。三回ほど、声がこだました。しかし、またすぐに

「二項対立から生まれる止揚だ！　弁証法的な世界せ」

「違う！　静的な対立の解体だ。したがって脱構築と呼ばれるべきである！」

「これは討議ではないだろうか。―――両項は互いに相互作用しながらこの宇宙に新たな意味を生成していくに違いない！」

哲学者たちが殴り合いを始めた。

どこからかすすり泣きが聞こえ、さらに悲痛な叫びが加わる。

「今シミュレーションできたのですが、その、ふつうでないカガミを使ってマクスウェルの悪魔が生まれた時にかかる人件費ですが、あああ！　悪魔だ、一億、秒給一億でも足りません！　経済効果がお、大きすぎる！」

経済学者が泣き崩れた。

「いや、クラウドファンディングがある！　地球上の六割から、一秒に一円を寄付する契約を勝ち取ればそれでいい！」

アントレプレナーが絶叫する。

「わかったぞ、これでヒラメとカレイの可塑性が証明できる！ 割れたカガミを向かい合わせに置いたところを通る時に目が片側からもう片方へと移動するんだ！」

魚類学者が机に頭を打ち付けて感動に震えている。

その時、建物が大きく揺れて、天井近くに掛かっていたカガミが閃いた。ふらりふらりと揺れて、ついにカガミの角運動量が、微分されて壁面の固定部に集中されて、落ちた。

会議室が静まり返る。そして、落下の衝撃で枠が外れ、カガミが二つになって、会議室の床を転がる。

それまで特別顧問席でいびきをかいていた代議士が

「カガミがあるぞ！ 割れた、割れた！」

「きつと『映しすぎ』と『映し足りない』に違いない！」

「やってみよう！ 図鑑が変わるぞオ」

魚類学者がカバンからヒラメを取り出す。

「やってみよう！ 起業！ 起業！ 起業！」

アントレプレナーは机の上に立ち上がって両手を振っている。

「やってみよう！」

「や、やめないか。学問の権威が—————」

制止する学術評論家はすぐに押しつぶされて、壁の隅に追いやられた。

やってみよう！ やってみよう！ やってみよう！ やってみよう！

大合唱が巻き起こった。音楽理論家が指揮棒を振り始めた。

やってみよう！

やってみよう！

やってみよう！

やってみよう！

∴

∴

* * *

最高学術会議議事録より

(：：)驚くべきことが明らかになった。結論から言うと、我々人間は鏡であった。映しすぎる鏡と映し足りない鏡、以下これを M+と M-と呼ぶことにするが、これを対置すると、二つの超次元極 EM+と EM-が互いに、無限後退を起こし、極めて特殊な力場が生成した。観測の結果、その場にいた十九人分の鏡が発生していた。生成された鏡の特性を計測しようとしたが、ついにそれには及ばなかった。病的なほどに複雑な反響の過程で、何が何処から生まれたのかは特定不可能となってしまった。また、鏡となった我々が二人で向き合った場合、相互無限後退の影響により、力場は消滅してしまった。結局は、力場における我々の配置の中に複雑性が保存されているということであろう。今後は、動物実験が計画されている。しかし、力場を生成するための配置を、我々の不在下で行う設備の開発が難航している。

(中略)

よく考えれば、単純な話である。我々が要素を付加、消去しつつ外界を跳ね返すのでなければ、我々を取り巻く膨大な情報は、いかにして生まれうるというのだろうか。